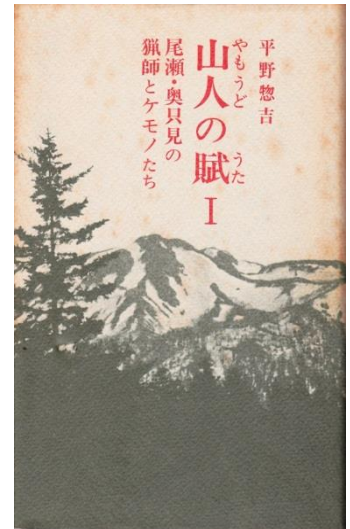


松山義雄著『狩りの語り部 ～伊那の山峡より～』

平野惣吉他述『山人の賦』他

マタギなどの専門の狩人や岩魚などを獲って生業とする山の漁師が居なくなつてから、人里離れた奥山で暮らす人々の生活やそこに住むケモノたちとの共生、狩の様子などの本は書店の民俗専門の書棚に僅かに並んでいる専門書の類だけになってしまった。一般書籍の本棚でもお目に掛かれるのは最近出版された「[新編越後三面山人記](#)」（田口洋美著、ヤマケイ文庫、2016 年刊）くらいなものではなかろうか。

さて、ここでは、かつて奥山での生業として続けられていた狩猟や川漁の様子、そこでの生活やその地に伝わる山の伝承などが散逸してしまわないうちに、最後の世代の老猟師や漁師から聞いた聞き書きの本を紹介したい。何れも半世紀近く前の昭和時代の終わり頃に出版されたものである。



◆松山義雄著『狩りの語り部』（正、続、続々3巻、法政大学出版局 1977 年刊）

伊那谷に勇名をはせた狩人たちの記録である。狩人たちの生きざまをはじめ、山国の生活の変遷や、人間と動物が同じ自然の中で生命を擦り合わせて共に暮らしている様子、また動物の知られざる習性や生態などが、生々しくまたユーモラスに語られている。狩や奥山の生活に関する昔からの言い伝えや習俗や伝承についても触れられていて、これらの言い伝えや習俗が実は山の暮らしや生態系や自然を守るための掟であったことなども興味深い。

3巻に亘って語り部が語った動物は、熊、猪、狼、犬、猿、鹿、兎、鷹、貉、狐、羚羊などに及び、それぞれの動物の暮らしや生態、人間との交感などが詳細に記録されている。特に日本では絶滅してしまった狼への挽歌も貴重であろう。

諸処に挿入された周はじめ撮影の往時の山村の懐かしい風景写真と相俟って、山村風土への愛着に満ちた山村博物誌といえよう。

◆平野惣吉他述『山人の賦』（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、3巻）（白日社 1984 年刊）他

新潟、群馬、栃木の3県と県境を接する福島県の最奥の村・桧枝岐村。今でこそ尾瀬観光や登山の基地となっているが、かつては隣村まで行くのに人馬がやっと通れるだけの山道を数十キロも行かねばならないような山間僻地の訪れる人も稀な寒村だった。この本は、この地で痩せた僅かばかりの畑を耕し、山に入ってケモノを狩りイワナを獲り、また山奥の掘立小屋に籠ってヘラや杓子を作っていた山人からの聞き書きである。あの手この手の狩談義、ケモノたちの驚くべき知恵と行動力など、山の神を祀り厳しい掟や仕来りを守ってこの土地に生きてきた猟師たち最後の生き証人の貴重なものがたりである。

秋山郷、谷川連峰、奥日光などの猟師から聞いた同様の本は、同じ白日社から下記が出版されている。『山と猟師と焼畑の谷』（秋山郷、山田亀太郎他述、1983 刊）、『山と猟師とケモノたち』（谷川連峰、山本福義他述、1979）、『森と湖とケモノたち』（伊藤乙次郎述、1986）、『イワナ・源流の職漁者』（平野他述、1987）。
[「山書の小溪」目次に戻る](#)